

# 家庭画報

# 8

August  
2008  
KATEIGAHO



みんなの歌、思い出の歌

# 日本の名歌、懐かし

独占密着取材 進化する歌舞伎

## 中村勘三郎ベルリンの熱狂

京の尼寺で習った

## 精進料理

修学院離宮・林丘寺から

美食を求めて避暑地へ小とこな旅

## 緑陰のレストランへ

軽井沢・箱根・蓼科・有馬

美術館新装オープン記念

## ウェッジウッド美の軌跡

洋の空間の中で

## リビングに似合う仏壇

避暑地の旅支度

## 藍が涼を呼ぶ夏きもの

ドレープやラインで装う

## ワンピースの洗練

決定版

## 宝飾時計の 最高峰を纏う



## 自分の価値観で判断する 西洋の観客は成熟している

ロンドンを中心にヨーロッパの舞台で約二〇年にわたって踊り続けてきた私。そんな私の知るヨーロッパの観客は自分に合わないとか、つまらないと思えば、途中であっても容赦なく席を立ちます。私もかつてロックシンガーのジミ・ヘンドリックスの音楽でバレエを踊ったことがあります。そのときは音楽が騒々しすぎて帰ってしまうお客さまがいました。ベルリンの観客も他のヨーロッパと同じで見方がとてもシビア。開演直後にふと周りを見渡すと、いかにもどんな芝居なのか見定めようと分析しているような難しい顔をしたドイツ人ばかりではありませんか。ところが、芝居が進むにつれて表情が緩んでいくのです。そして、観客は芝居の一員となり、いつしか客席と舞台が一体化したような感覚に包まれて

いく。江戸時代の人々が観ていたものを、私が、そしてすべての観客が息を呑んで観ているのです。これはバレエにも通じますが、普遍的な物語性に時空を超えた繋がりを感じました。特に緊張感が高まったのは親殺しの後、一瞬にして明るくなるシーン。お祭りで男衆が踊り狂う中で、団七の周りだけが静寂に満ちている。動と静の対照的な様子が、親殺しの場面よりももっとぞっとしました。

カーテンコールでは、ドイツ人は「ブラボー！」と叫び、口笛を吹き、拍手の代わりに床を足で踏みならします。足踏みというドイツ人特有の表現。私もフランクフルトで「白鳥の湖」を踊ったときに経験し、この足音の意味がわからず戸惑ったことがあります。足音で会場中が揺れんばかりに盛り上がる舞台の余韻漂う心地よいひととき。熱演された勘三郎さんを包んだこの瞬間こそ、舞台人に与えられた幸せな時間なのだと思います。



## Kabuki in Berlin



場面転換などで演奏された太鼓。通常の歌舞伎の囃子方とは異なるもので「英哲風雲の会」に属する上田秀一郎氏が演奏。会場が沸いた。



夏祭りのシーンにはドイツ人のエキストラも多数参加した。「チヨウサヤ、ヨウサ」という掛け声とともに客席通路を賑やかに通った。



歓声と拍手に包まれた初日のカーテンコール。最後にはスタンディングオベーションとなり、前に駆け寄って写真を撮る人も多かった。